OR 22-1　小中学生を対象とした認知症高齢者イメージの内容分析
－ 近江八幡市における認知症教育の取り組みより（その 1）－

○ 村山陽（むらやまよう）、小池高史 、鈴木宏幸、鄭恵元、野中久美子、大場宏美、
桜井良太、藤原佳典 （東京都健康長寿医療センター研究所 ）

【背景】高齢化を背景に認知症高齢者は増加傾向にあり、認知症をめぐる社会問題は後をたたない。この課題に際して、地域全体で認知症高齢者を支える取り組みである「認知症サポーター」養成事業(厚生労働省)が行われている。本研究では、「認知症サポーター」事業の一環として実施されている近江八幡市内の小中学校における認知症啓発授業に注目し、小中学生の認知症高齢者イメージに及ぼす影響を明らかにする。

【方法】**調査対象**：認知症啓発授業を受講した近江八幡市内の小中学生761名(男性392名,女性365名,不明４名)　**調査時期** ： 2011 年 9 月～2012 年 1 月　**調査方法** 認知症啓発授業の事前・事後に質問紙調査形式で実施　**調査内容：①フェイスシート** 性別・学年、**② 認知症高齢者イメージ** 「《認知症高齢者》と聞いて思いうかべる言葉を５つまであげてください。」と質問し、順に言葉を記入させた。この項目は社会的表象理論をもとにMolinerら(2002)が開発した質問紙をもとに作成した。

分析方法:「認知症高齢者とは」に対する自由記述の質的データ解析を「SPSS Text Analysis for Surveys」を使用し、テキストマイニング手法により実施した。自由記述から得られたテキスト型データを分かち書きし同義語や類義語を一つの言葉に置換する作業を行った。例えば、記憶力が悪い、覚えが悪いなどは「記憶力の障害」に、趣味をなくす、興味を持たないなどは「興味の喪失」に置換した。

【結果】閾値2以上の構成要素は事前調査986、事後調査1367であった。事前・事後調査ともに最も出現頻度の高かったものは、「記憶の障害」であり、事前406回(41.18%)、事後491回(35.92%)それぞれ出現した。次いで事前調査では、「コミュニケーションの問題」101回(10.24%)、「嫌悪・偏見」91回(9.24%)が見出された。事後調査では、「抑うつ・不安」116回(8.49%)、「病気」112回(8.19%)が示された。さらに、事後調査では、「能力の保持」85回(6.22%)、「認知症者ケア」13回(0.95%)、「諦め」16回(1.17%)が新たに出現した。認知症啓発授業(事前vs.事後)により各項目で差があるか検証するために、$\chi 2$検定を行った。その結果、「嫌悪・偏見」「身体機能の低下」が事前で多く見られた($p<.05$)。「憐み・共感」「温和性」「介護」が事後で多く認められた($p<.05$)。

【考察】認知症啓発授業前の小中学生の抱く認知症高齢者イメージは、記憶力だけでなく全機能の低下や嫌悪・偏見を伴うイメージが特徴的に見られた。啓発授業後には、記憶力は低下するものの、一部の能力は保持される認知症高齢者イメージが顕著に認められた。さらに、啓発授業後には認知症高齢者に対するケアや共感するイメージが付与された。

【結論】認知症啓発授業は小中学生の正確かつポジティブな認知症高齢者イメージ形成に影響するとともに、それが認知症高齢者に対するケア意識の醸成に寄与する可能性が示唆された。

E-mail；yhoyho05@tmig.or.jp